



本館展示のチエチエメ二号に代表されるように、ミクロネシアでは、航海に長けた人々が生活している。写真は、ラモトレクへの航海のため、連絡船からポートでサタワル島へ向かっている一コマ。1979年、ヤップ州サタワル島（ミクロネシア連邦）にて、秋道智彌 撮影。

国立民族学博物館所蔵 ミクロネシア・サタワル島写真コレクションより



1970年代のオセアニア島嶼部では、いまだに豊かな海洋文化が生きていた。写真は、ミクロネシア連邦チューク州ウルル島にて手斧で楫づくりが行われている姿を記録している。1974年、チューク州ウルル島（ミクロネシア連邦）にて、須藤健一 撮影。

国立民族学博物館所蔵 須藤健一アジア・オセアニア写真より



パプアニューギニアでは、1976年に独立一周年を祝う記念式典が開催された。写真は、式典会場に向かうためバス停に集まる人々。民族衣装からカジュアルな洋装までみられる。1976年、ポートモレスビー（パプアニューギニア）にて、大島襄二撮影。

国立民族学博物館所蔵 大島襄二写真コレクションより



1975年9月16日、パプアニューギニアは独立国となった。写真は、1976年の独立一周年に首都ポートモレスビーで開催された記念式典に行くため、盛装してバスを待つ人々の姿である。1976年、ポートモレスビー（パプアニューギニア）にて、大島襄二撮影。

国立民族学博物館所蔵 大島襄二写真コレクションより



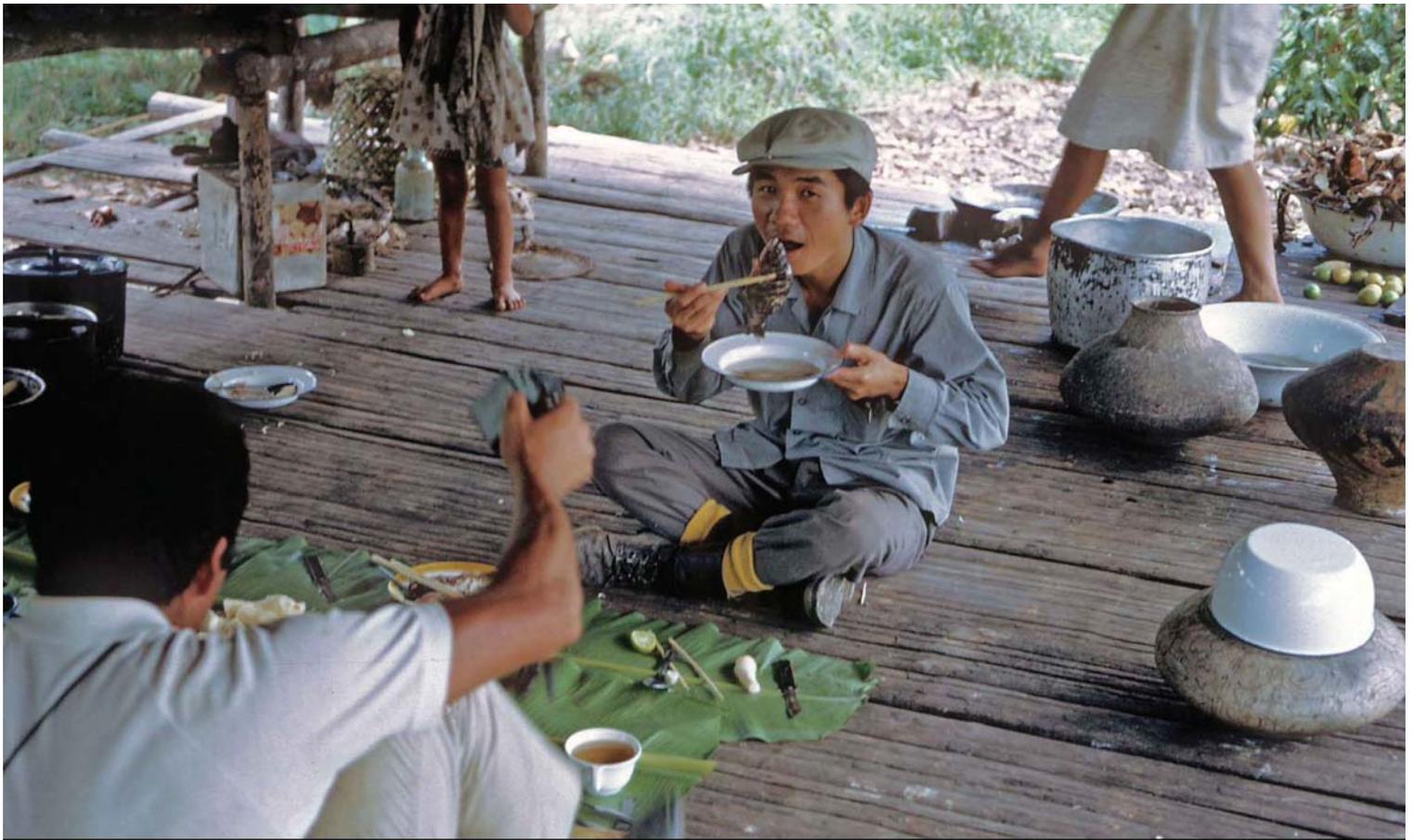
1979年ミクロネシア連邦ヤップ州サタワル島にて、本館教員の調査隊によって伝統的航海技術等に関する総合的調査が行われた。写真は、サンゴ礁島への航海に際して帆綱を握る前館長の須藤健一。 1979年、ヤップ州サタワル島（ミクロネシア連邦）にて、秋道智彌 撮影。

国立民族学博物館所蔵 ミクロネシア・サタワル島写真コレクションより



ペルー南高地で暮らすケチュアの人々によるジャガイモの植えつけ。使用している踏み鍬は、木の柄に垂直につけた横木に足を掛け、柄の先端につけた刃部を突き刺して土を掘り起こす道具。山本紀夫が同行した映像取材中の一コマ。 1977年、クスコ州シクア二付近（ペルー）にて、グループ現代 撮影。

国立民族学博物館所蔵 映像取材関連写真資料より



ペルー東部、ウカヤリ川支流タマヨ川近くのイミアコチャ湖で釣り上げたピラニアを食べる友枝啓泰。友枝と大貫良夫は、大阪万博に向けて資料収集を行い、シビーボの人々の暮らしを調査した。1969年、ウカヤリ川支流タマヨ川付近（ペルー）にて、大貫良夫 撮影。

南山大学人類学博物館所蔵 友枝啓泰アンデス民族学画像コレクションより



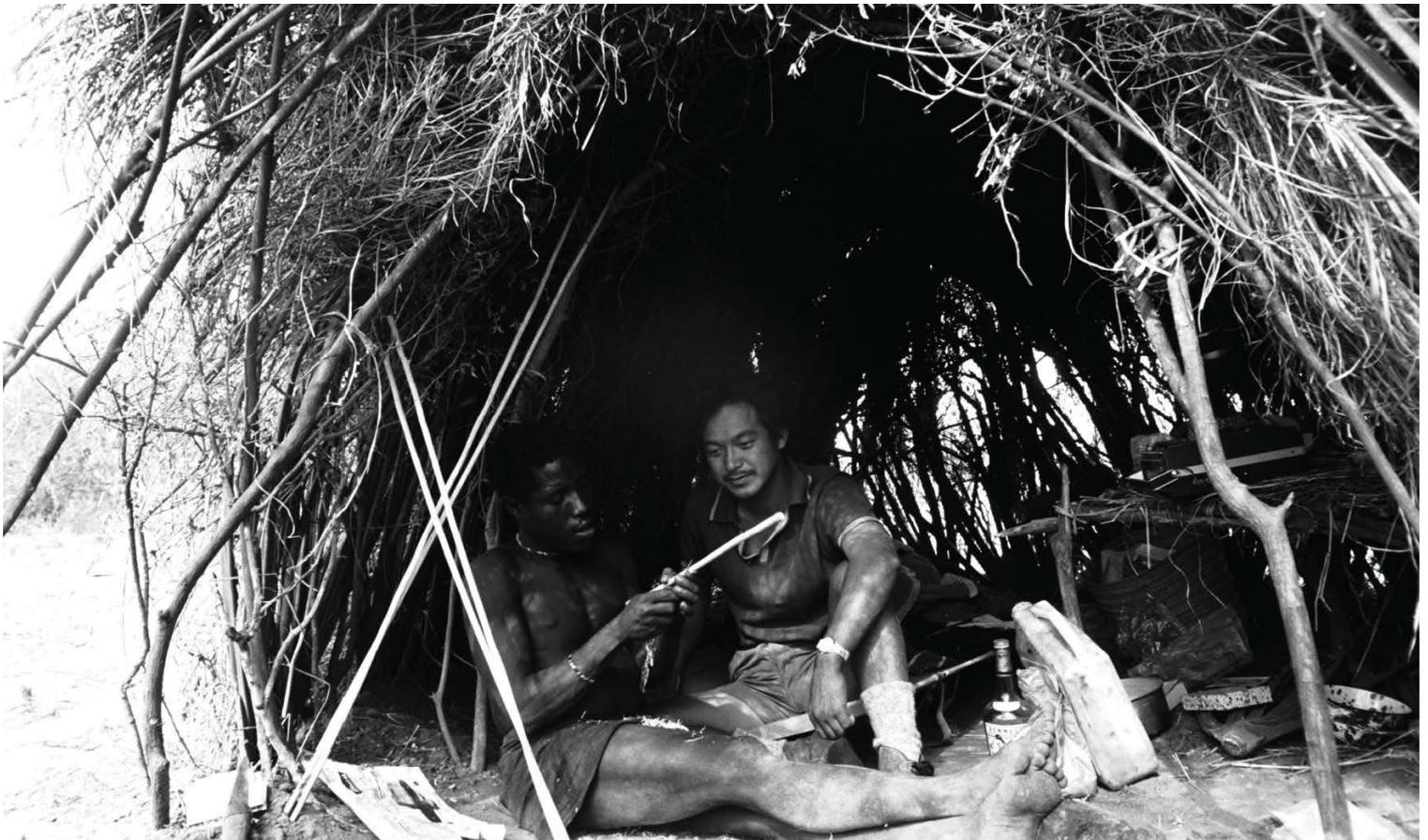
キチエ民族の町チチカステナンゴでは、守護聖人である聖トマスの祭礼の際に「征服の踊り」が演じられる。写真は、収集したその衣装の着付け方法を習っているところ。1987年、チチカステナンゴ（グアテマラ）にて、八杉佳穂 撮影。

八杉佳穂氏 提供



ユーゴスラヴィア連邦セルビア共和国の首都であったベオグラードの市場。セルビアは国土はさほど大きくはないものの豊かな農業生産国であった。もう、この頃にはモモの季節は終り、スイカ、シュリヴァとブドウの季節となっていた。1969年、ベオグラード（セルビア）にて、小林茂撮影。

国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査写真コレクション（第2次京都大学ヨーロッパ学術調査隊）より



東アフリカのサバンナ環境では、遠くの獲物を目視して射止めるため、槍や弓矢などの狩猟具が用いられる。写真は、狩猟採集民ハツアピのあいだで調査をおこなう石毛直道。1966年頃、マンゴラ村（タンザニア）にて。

国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査写真コレクション（京都大学アフリカ学術調査隊）より



1961年、日本からは初めて、アフリカ社会についての学術調査隊が派遣された。のちに民博館員となる梅棹忠夫や石毛直道、和田正平（左から2人め）、福井勝義（同3人め）、端信行らも、この調査隊に参加した。1964年頃、ギティン村（タンザニア）にて。

国立民族学博物館所蔵 京大大学術調査隊写真コレクション（京大大学アフリカ学術調査隊）より



1963年京大大学アフリカ学術調査隊人類班第二次隊のタンザニアでの調査。梅棹忠夫を中心に、独特な整理方法によるフィールドワークを行いながら、活発な議論を繰り広げたという。1963年、マンゴラ村（タンザニア）にて、和崎洋一撮影。

国立民族学博物館所蔵 京大大学術調査隊写真コレクション（京大大学アフリカ学術調査隊）より



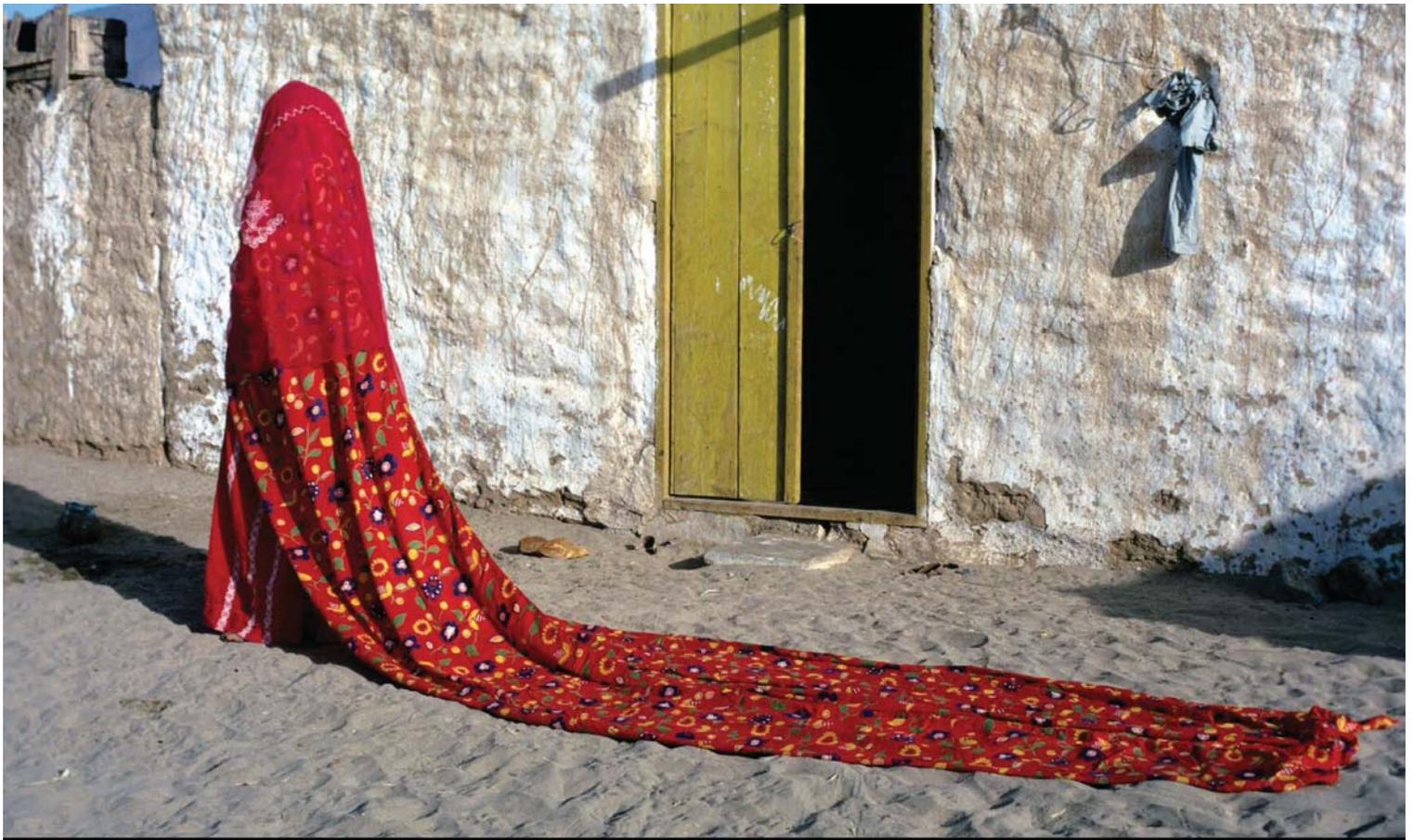
西アフリカの多くの民族と同じように社会身分の区別をもつフルベ社会では、世襲制の楽師たちが命名式や成人儀礼をはじめ祭事などの機会に音楽を奏でて場を盛り上げる。1984年、ンガウンデレ（カメルーン）にて、和田正平撮影。

国立民族学博物館所蔵 和田正平撮影アフリカ関係写真資料コレクションより



1970年代頃の 아프리카では、日用の食器として、ヒョウタンや窯焼きの土器などを使うことが多かった。現代ではホーローびきの食器など、輸入した工業製品を使うことが多い。1974年、マルア（カメルーン）にて、江口久撮影。

国立民族学博物館所蔵 江口久アーカイブより



「シュューフ族の未婚女性は、スマーダとよばれるごつい布地…をかぶる。背丈の三倍ほどの長いもので、これをずしりと頭からくるぶしまでかぶる。…男性とすれちがうと、その長いすそを、頭からすっぽりかぶって、しゃがみこむ。」(片倉もとこ『アラビア・ノート』、61頁) 1960年代末～1970年代初頭、ワーディ・ファーティマ(サウジアラビア)にて、片倉もとこ撮影。

国立民族学博物館所蔵 片倉もとこ撮影アラブ社会コレクションより



1984年10月14日、昭和天皇は民博を見学された。写真は、音楽展示場を見学される昭和天皇。ご案内しているのは、梅棹忠夫(左)と藤井知昭(右)である。

国立民族学博物館所蔵



ラミドー（フルベの王様）の王宮の草ぶき屋根の前で演奏する楽師たち。バラフォン（木琴）、金属製打楽器、太鼓を演奏している。バラフォンの鍵盤の下には共鳴器としてヒョウタンが取り付けられている。1984年、ンガウンデレ（カメルーン）にて和田正平撮影。

国立民族学博物館所蔵 和田正平撮影アフリカ関係写真資料コレクションより



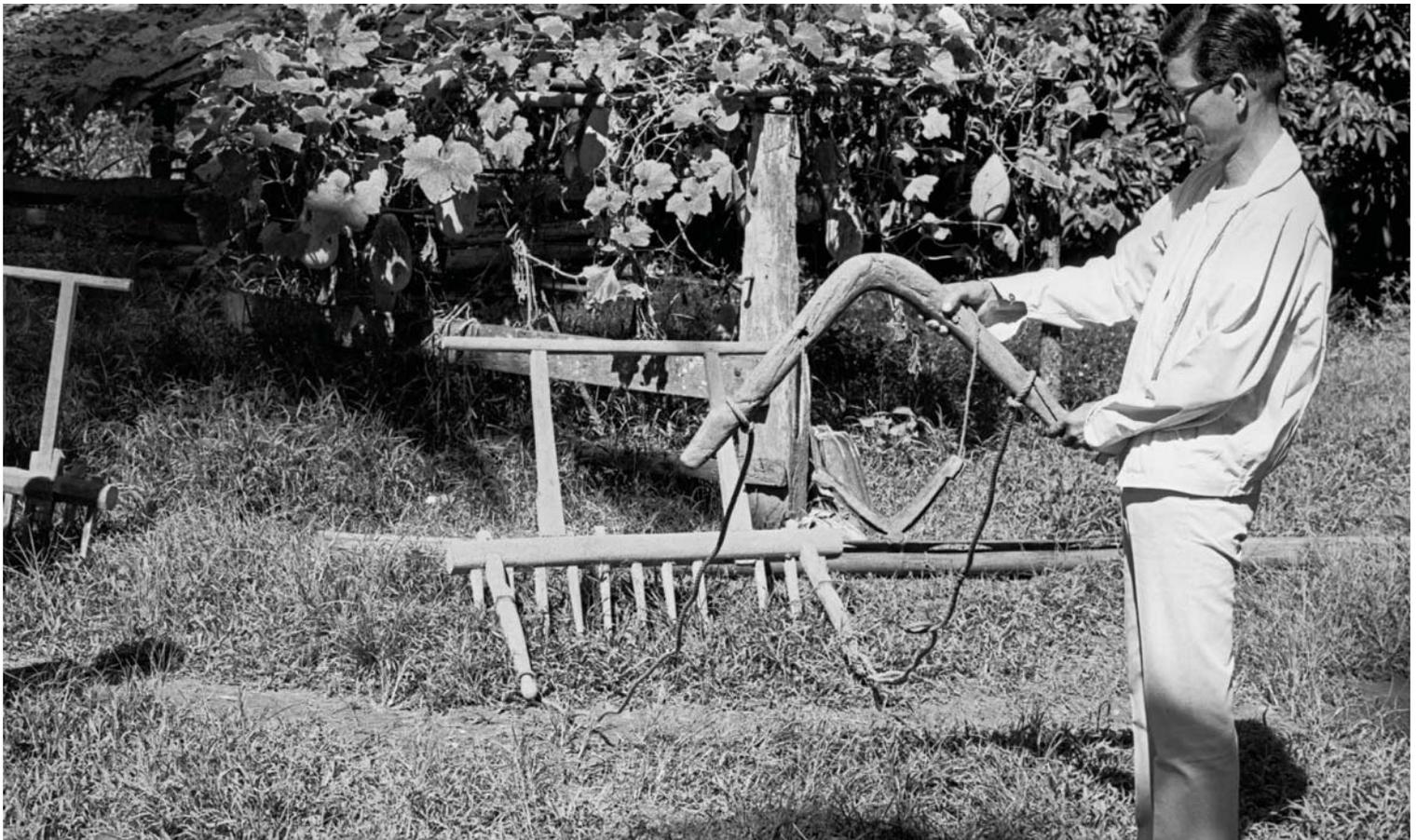
人の背でポカラまで運ばれる民博の資料。11年ぶりに調査村ガーラを再訪した佐々木高明が、資料を購入し収集した。中央に写る長い棒は、<sup>カス</sup>犂の犂轡である。1974年頃、カスキ郡（推定）（ネパール）にて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



バンコクの倉庫で、収集した竜骨車を港へ運ぶためにトラックに乗せるところ。竜骨車は中部タイの平野部に特有の末端揚水機で、1974年の収集時にはすでに消滅しかけていた。 1974年、バンコク（タイ）にて、佐々木高明 撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



北タイの農村で、水牛に引かせて水田の土をかきならす馬鍬。男の人が手にしているのは、水牛の首にそれを取り付けるくびき。男性がだれかは不明だが、民博の収集チームの一員か。 1974年、北タイにて、佐々木高明 撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



北タイの農村では、つい最近まで稲の脱穀作業に脱穀用大カゴが用いられていた。写真の左から2人めは、田辺繁治、宇野文男とともに農村をまわって収集をしていた佐々木高明。1974年、北タイにて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



濟州島を訪れた梅棹忠夫（左から2人め）、松澤員子（同4人め）、杉田繁治（同5人め）。濟州島は、15世紀初頭まで独自の王国に統治され、固有の文化要素も豊富である。1982年、濟州島（韓国）にて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



市の風景。半月市、十日市、五日市、四日市など、韓国の地方では現在でも広場などに市が立つ。常設市場が増えるにつれ衰退しているが、この頃の市にはまだ賑わいが感じられる。 1982年、済州島（韓国）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



ムラに旅芸人でも来たのだろうか。あるいは、訪問団の一行を歓迎する宴が開かれるのか。着飾ってムラの広場に向かう人びと。行事の日にチマチョゴリを着る女性がいるのは、現在も同じだ。 1982年、済州島（韓国）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



伝統様式を取り入れた建築を見学する。韓国の伝統家屋は朝鮮戦争や急速な近代化で、濟州島でも戦後の動乱のため、ほとんど失われた。こうして現代的な建材や技法を取り入れながら再創造されている。 1982年、濟州島（韓国）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



伝統的な台所。パティオに再現されている酒幕（旅人用の料理屋兼旅館）のものより素朴ながら、実際に使われている生活材としての壺やかまどが目を引く。 1982年、濟州島（韓国）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



雲南省南部のタイ族村で、牛や、犁などの農具を用いて耕す人々。当時の農業はまだ機械化されておらず、撮影時には人民公社との協同労働もみられた。1980年、雲南省西双版纳（中国）にて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



佐々木高明らの調査隊が貴州省東南部の村を訪れた時、銀細工で盛装したミャオ族の女性たちが一行を出迎えた。近年、ミャオ族の銀細工製品は観光地でも売られている。1980年、貴州省施洞（中国）にて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



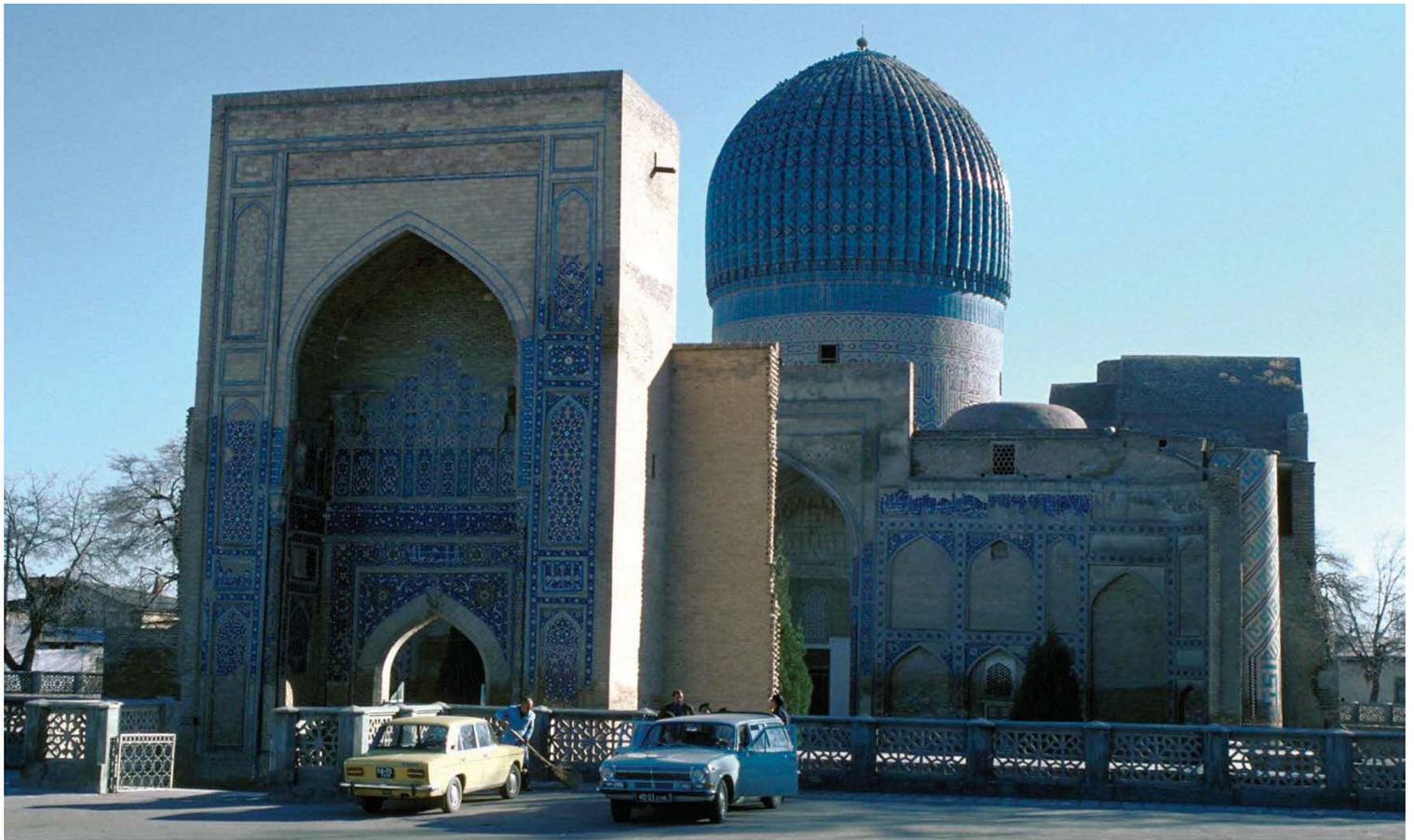
観光地として有名な桂林・陽朔を流れる漓江。山水画のような景観のなかで、筏をゆさぶり、大声をかけ、水面を竿でたたいて鷓を追う、鷓飼の姿がみられる。 1982年、広西壮族自治区陽朔県（中国）にて、佐々木高明 撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



ソビエト科学アカデミー民族学研究所の招きで加藤久祐夫妻とソ連領内の視察旅行の際に撮影。たくさんのメロンやスイカが地面に並べられ、買いにくる人々で賑わっている様子。 1981年、ウズベキスタンにて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



ウズベキスタン共和国サマルカンドに所在する、15世紀に建てられたグーリ・アミール廟。ティムール帝国の始祖であるティムールをはじめ、彼の一族が眠る霊廟である。1981年、ウズベキスタンにて、梅棹忠夫撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



ソビエト科学アカデミー民族学研究所の招きで加藤久祚夫妻とソ連領内の視察旅行の際に撮影。バザール（市場）にて、山積みのザクロや干した杏（アンス）を売る男性。1981年、梅棹忠夫撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



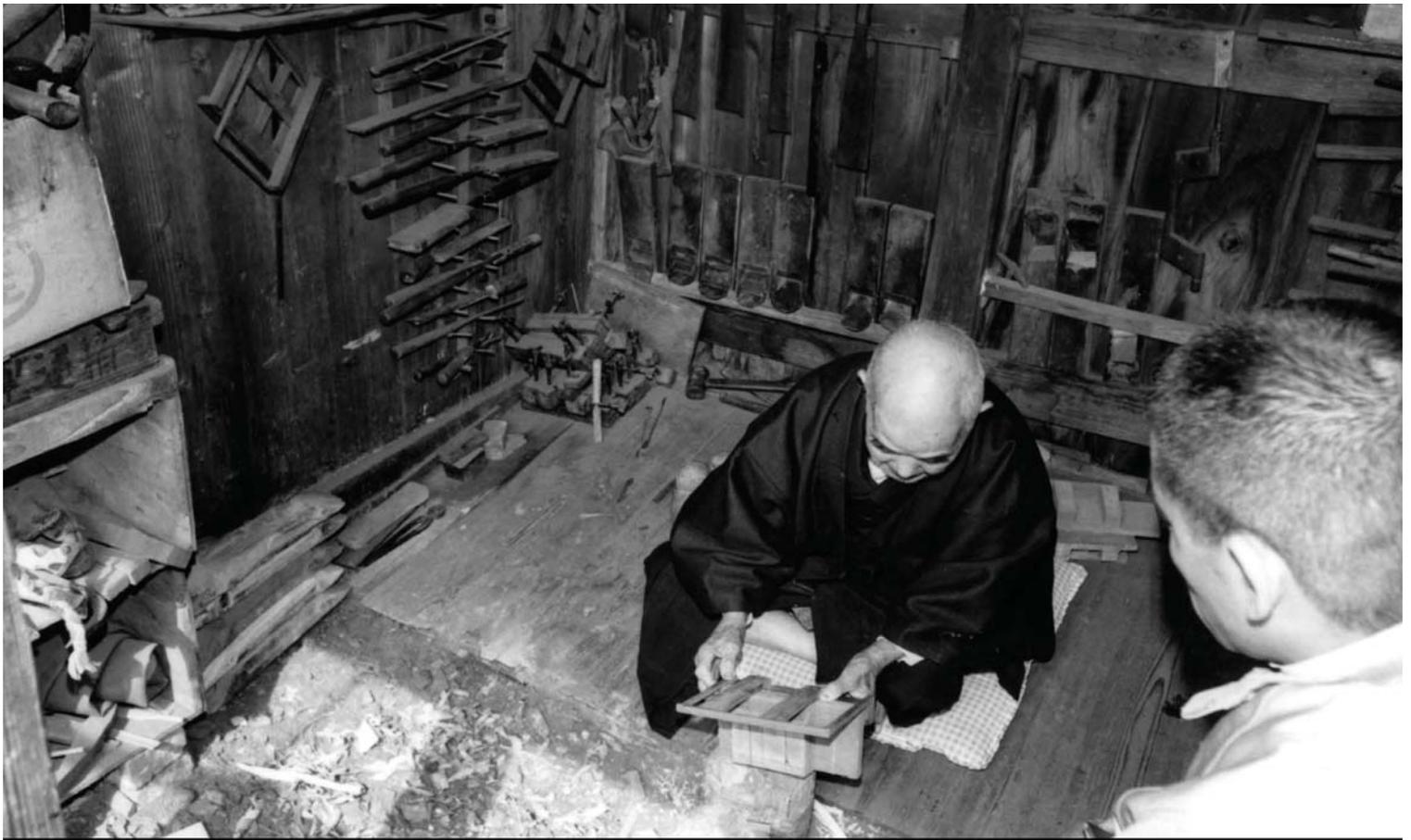
自由な旅行が厳しかった社会主義時代に、モンゴル科学アカデミー副総裁ツェグミド氏が来館されたのを機に実現した視察旅行。  
右端は加藤久祚。 1982年、ハラホリンのエルデネ・ゾー寺院（モンゴル）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



社会主義時代から温泉保養地として知られていたホジルトが、外国人旅行者にも宿舎として提供された。ゲルと呼ばれる天幕の内で、  
右から、梅棹忠夫、加藤久祚、松原正毅。 1982年、モンゴルにて。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



丹波山村における下駄作りのようす。背後には、厚みがある木材のほか、用途の別によりかたちが異なるノコギリやノミ、キリなどの工具が置かれている。藤井龍彦らは1975年に丹波山村で生活用具を収集した。 1974年、山梨県北都留郡丹波山村にて、藤井龍彦 撮影。

国立民族学博物館所蔵



南米アンデス地帯で暮らす人々の生態系利用に関する本格的な研究は1978年に始まる。マルカバタ村での山本紀夫と村の少女達。後方には山本が設置した百歳箱が見える。 1984年、クスコ州マルカバタ村（ペルー）にて、山本紀夫 撮影。

山本紀夫氏 提供



ディティカカ湖で暮らすウロの人々は、湖に自生するトラ（カヤツリグサ）を数巻絡めた浮島で暮らす。山本紀夫はウロの生活用具を収集し、移動に欠かせないトラ舟（通称あし舟）の製作過程を綿密に調査した。1977年、ブーノ州ディティカカ湖（ペルー）にて、山本紀夫 撮影。

山本紀夫 提供



モンテネグロでの調査中にラクシア（アルコール度数の高い蒸留酒）を振る舞われる梅棹忠夫。自主管理、非同盟諸国首脳会議などで知られたチトーが率いたユーゴスラヴィア連邦も社会主義体制崩壊後の内戦によって崩壊し、セルビア、クロアチア、スロベニア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、そしてモンテネグロも独立した。1969年、デブツァ（モンテネグロ）にて、小林茂 撮影。

国立民族学博物館所蔵 京都大学先端科学技術コレクション（第2次京都大学ヨーロッパ学術調査）より



ベオグラード街頭で通行人の体重を計る体重計屋。1日中ぼんやりと座ってお客を待っている。ルーマニアなど社会主義陣営ではよく見られた光景である。現在ではイタリアやオーストリアの駅などにコインを入れて測る体重計が並んでいる。1969年、ベオグラード（セルビア）にて、小林茂 撮影。

国立民族学博物館所蔵 東京大学学術観望写真コレクション（第2次京都大学ヨーロッパ学術観望隊）より



イタリア共和国の小さな村での祭り。カトリック教会でミサを挙げたのち、聖者像、マリア像などがかつぎだされ、隣村から雇われた楽隊とともに村のなかをねりある。村びとは、老人も子どもも、その行列にくわわる。こうした行進はキリスト教の祭日で典型的な行事である。1969年、チェルクエート（イタリア）にて、梅棹忠夫 撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクション（第2次京都大学ヨーロッパ学術観望隊）より



写真が撮影されたモンテネグロを含む地中海圏では、羊の飼養が重要な生産となってきた。写真は羊を追いつつ羊毛をつむぐ村の年輩の女性である。羊毛はシャモジ形をした木製の棒の先にしばりつけられていて、棒はもう一方の端を黒のベルトにさしこんで固定される。1969年、デブツァ（モンテネグロ）にて、小林茂撮影。

国立民族学博物館所蔵 京都大学宇部観音寺写真コレクション（第2次京都大学ヨーロッパ学術調査隊）より



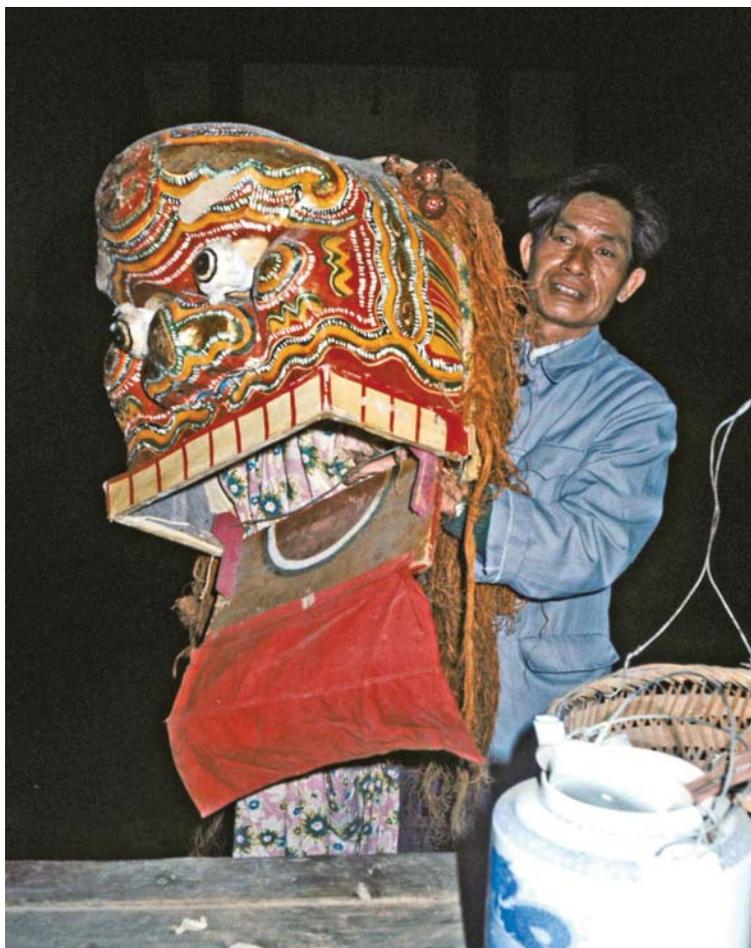
モンゴルのオルホン渓谷に立つ、キュル・デギン（額特勤）碑文を調べる梅村忠夫、加藤九幹、松原正毅、庄司博史。732年に建立されたこの碑文は、突厥文字と漢字で記されている。写真は西面。1982年、オルホン渓谷ホショー・ツアイダム（モンゴル）にて。

国立民族学博物館所蔵 梅村忠夫写真コレクションより



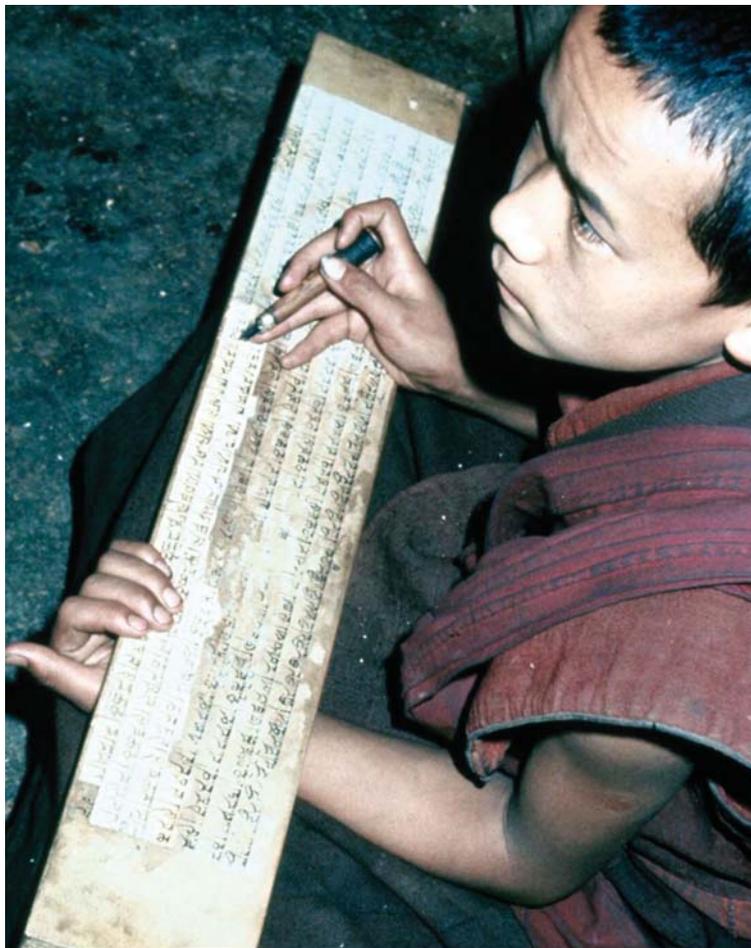
中部タイの農村における、臼と杵を用いた稲米の精白作業。現地で収集活動をしていた佐々木高明らの前で、買収助手と村の女性が使い方のデモンストレーションをしてくれた。1974年、中部タイにて、佐々木高明撮影。

国立民族学博物館所蔵 佐々木高明コレクションより



梅棹忠夫は、対外開放後、客家の故郷として名高い梅県にいち早く足を踏み入れた日本人研究者の一人でもある。写真の獅子頭は、現在、梅県ではほとんどみられなくなった。1985年、広東省梅県（中国）にて、梅棹忠夫撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより



1978年12月に対外開放が始まり宗教への規制が緩和されると、チベット語教育も解禁されるようになった。写真は、シガツェ市のタシルンボ寺で、梅棹がその様子をいち早く撮影したものである。1983年、西藏自治区日喀則（中国）にて、梅棹忠夫撮影。

国立民族学博物館所蔵 梅棹忠夫写真コレクションより